

奈良県近世社寺建築の調査 (2)

建造物研究室

昨年度から継続して行っている奈良県近世社寺建築緊急調査の第2年度にあたり、本年度は主に県下北半部を対象とし、奈良市・大和郡山市・天理市・生駒市・おびよ添上郡・山辺郡・生駒郡・磯城郡の各町村、宇陀郡・北葛城郡の一部を調査した。調査建物は第1次調査318棟で、このうち211棟についてさらに2次調査を行った。本年度をもって県下全域の調査を完了したこととなり、昨年度と併せて1次調査615棟、2次調査374棟となる。

神社建築では主として本殿を調査した。拝殿は江戸後期以降の新しいものが多いが、東山間部では茅葺の拝殿が多く残り注目される。本殿は春日造が県下全般の傾向であり、次いで流造が散在する。春日造では山添村の戸隠神社本殿、天理市の三十八社神社本殿など室町時代にさかのぼるものをはじめ桃山から江戸初期の遺品が数多く見いだされ、特に天理市に集中して残る。河合町の広瀬神社本殿(正徳元年)や安堵村の飽波神社本殿は江戸中期の春日造を代表するものであり、細部意匠が華やかとなる。田原本町の多神社は同時期の本殿(享保20年)4棟が並び建ち社頭景観ともに優れている。流造では数少ない三間社の例に香芝町の大坂山口神社本殿があり17世紀初頭にさかのぼる貴重なものである。

春日大社の式年造替にもなって移築された旧社殿も多く、本社あるいは若宮の旧本殿に奈良市の嶋田神社本殿・鏡神社本殿、天理市の楯神社本殿、斑鳩町の春日神社本殿、安堵村の杵築神社本殿、川西町の糸井神社本殿・比売久波神社本殿、室生村の竜穴神社本殿があり、春日大社摂末社旧本殿も数多い。また談山神社旧本殿を移築したものに広陵町の百濟寺本堂、奈良市の東大寺東南院持仏堂があり、古式を踏襲した春日社とは異なり造替毎の細部意匠の変遷を追跡できる。そのほか神社建築として川西町の比売久波神社経庫(享保4年)は類例の少ない高床倉庫として重要である。

寺院建築は仏堂のほか庫裡・書院・経藏・鐘樓・湯屋・門など多岐におよぶが宗派的な特色が明瞭な仏堂について触れておく。南都六宗・真言宗の伝統的寺院では近世に入っても依然として身舎一廂構成の伝統的な構造形式を基調としたものがみられ、奈良市の海竜王寺本堂(17世紀中)・白豪寺本堂(17世紀前)、大和郡山市の額安寺本堂(慶長11年)に代表される。奈良市の西大寺本堂(寛政～文化)のように江戸後期にもそうした傾向を留めるものがあるなど奈良県ならではの特色である。奥行の深い、いわゆる密教系本堂形式を踏襲するものに大和郡山市の矢田寺本堂(元禄頃)があり、中世の古材を留める大規模な建物である。そのほか奈良市東大寺の戒壇院千手堂(慶長10年)・天理市長岳寺の大師堂(寛永)など優品が多い。特異な例に西大寺愛染堂(明和4年)があり、仏堂の左右に書院を一体化した形式を採る。

浄土系寺院は東山間部を除き平野部に広くみられる。旧奈良町には靈嚴院本堂(寛永11年)・念仏寺本堂(寛永7年)など17世紀前半の浄土宗本堂がまともに残り、五劫院本堂(元和10年)

もこの系統に属す。融通念仏宗本堂は浄土宗本堂形式に類似し、代表例に大和郡山市円融寺本堂（正保2年）がある。浄土真宗本堂では橿原市称念寺本堂（慶長）・田原本町浄照寺本堂（慶安頃）など中核となった大規模寺院に優れたものが残り、在郷寺院の例では川西町の光林寺本堂（承応3年）などが古い。幕末の発達した形式を有する典型例に広陵町の経行寺本堂がある。県下有数の巨大建築である。なお、大和郡山田城下町では浄土宗・浄土真宗本堂ともに17世紀中頃から18世紀初期にかけてのものが揃って残り、群としても貴重である。日蓮宗本堂は少ないが、奈良市蓮長寺本堂（承応2年）は平面形式や極彩色・鏡天井などに宗派の特色をよく現わしている。

禪宗寺院では方丈形式の例に王寺町の達磨寺客殿（寛文7年）・奈良市芳徳寺本堂（正徳4年）がある。奈良市円照寺円通殿は数少ない茅葺の仏堂で草庵風の趣を伝える。

なお、明治の神仏分離のさい興福寺・多武峰などから移築された堂宇も見いだし、奈良市円福寺本堂・大和郡山市宗延寺本堂など優品が残る。

以上代表例を掲げながら本年度調査の概要を記したが、県下の近世社寺建築の造営活動の盛んな時期を目安に大旨3時期に区分できる。第1期は秀頼による法隆寺慶長大修理をはじめ南都諸大寺の復興を契機とする江戸初期の造営であり、戒壇院千手堂・海竜王寺本堂など伝統的な形式を踏襲し、細部意匠も抑制され落ち着いたものを基調とする。

第2期は桂昌院による東大寺大仏殿の元禄復興を契機とする江戸中期の造営である。軸部の成の高いものが現れ、奈良市の弘仁寺本堂（元禄10年）・生駒市の宝山寺本堂（貞享5年）など二重仏殿もこの時期に多い。組物に雲形肘木が流行するなど細部も華やかとなる。

その後造営活動は一時停滞するが、18世紀末から幕末にかけて彫刻意匠の発達した質の高い大型本堂ができ、第3期に位置付けうる。西大寺本堂・経行寺本堂および明日香村岡寺本堂（文化2年）に代表され、構造・意匠の発達の上で近世建築の到達点を示す。

2年度にわたる調査の結果、奈良県近世社寺建築の特質、時代的な流れ、各宗本堂形式とその発展過程、神社本殿の形式分布と古社殿移築の様相、細部様式の変遷などが把握でき、収集した多くの造営関係史料の考察を含め報告書の刊行を予定している。（清水真一）